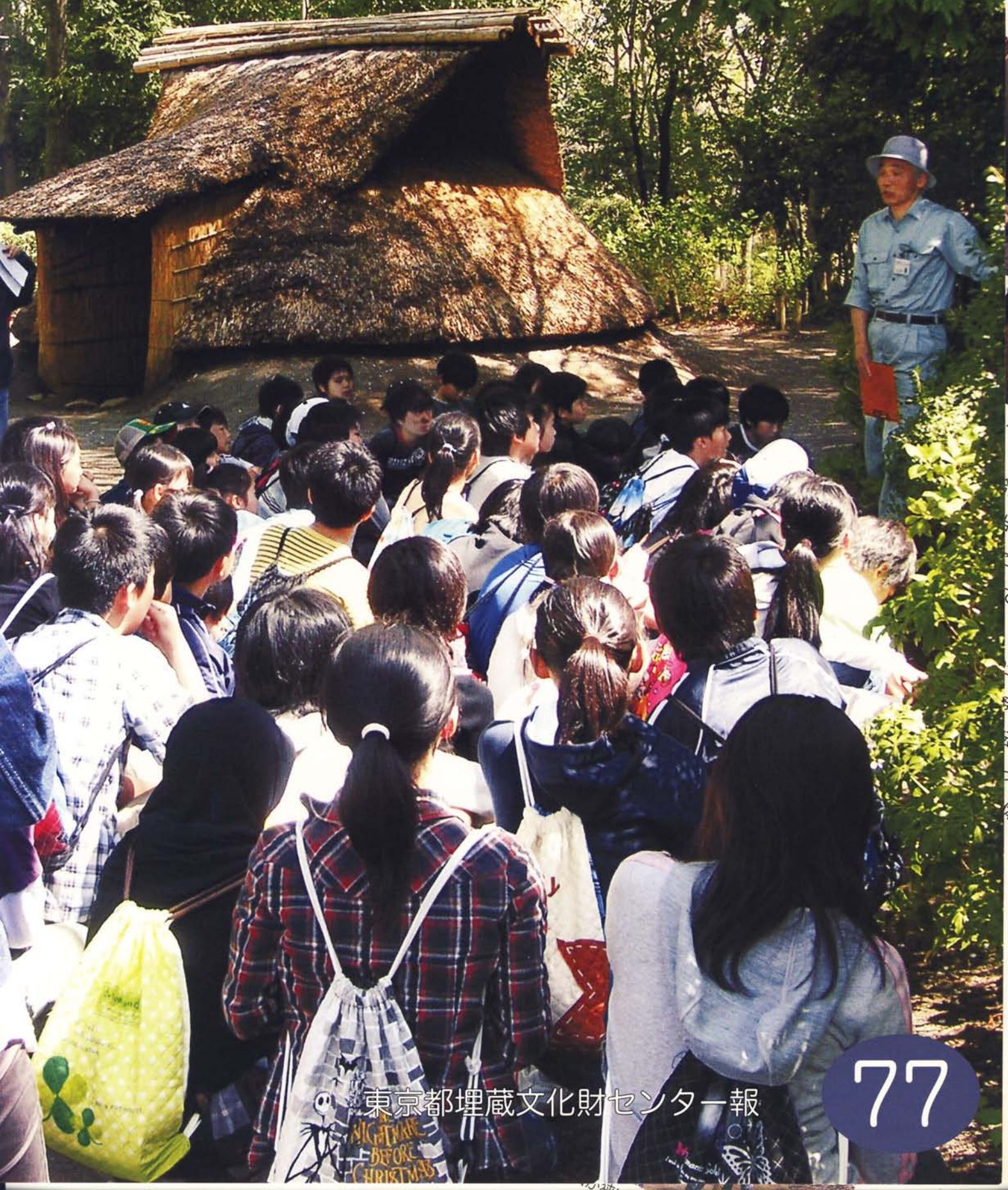


たまのよこやま





当 センター利用者の約 1/3 を占めるのが、学校の団体見学です。昨年度は、年間 127 校、8,624 人、今年度も既に 6,500 人以上の生徒さん・先生方にご利用いただいております。特に、小学校 6 年生の歴史の授業が始まる春は、毎日多くの生徒さんの歓声で賑わう時期。今回は、この団体見学の様子について御紹介しましょう。

見 学は、施設の 3 つのゾーン〔展示ホール・体験コーナー・遺跡庭園〕が中心です。各学校のご都合・ご希望に応じて、3～5 つの内容を 15～30 分ずつ組み合わせ、全体で 1 時間半～3 時間の行程で行っています。2～4 つのグループで各ゾーンに分かれてご覧いただくこともできますので、生徒数の多い学校でも、学年単位での利用が可能です。当日の見学メニューについては、先生方に事前の下見にお出でいただいた際、個別に打合せの上、各学校の希望や事情に応じた内容で作成させていただいています。

時 間に余裕のある学校は、まず会議室で、多摩丘陵に暮らした数千年前の人々のくらしぶりを 15 分ほどにまとめた映画「縄文人のくらし」を



土器の中って、けっこうツルツルしてるね！



石皿って、こんなにきれいな粉ができるんだ！

ご覧いただけます。また同映画については、DVD の貸し出しも行っておりますので、事前もしくは事後の学習に活用していただくこともできます。

展示ホールの今年の目玉は、なんといっても企画展の露出展示。多数の縄文土器にじかに触れられる点は、先生方からいただいたアンケートでも、大変ご好評をいただいております。当センターも、実物との触れあいを通じて、文化財を大切にする気持ちも育んでもらえたらと思います。

体験コーナーは、展示ホール横のコンコースを利用した小さなエリアですが、「本物の縄文土器に触れてみよう」・「縄文土器の文様をつけよう」・「土器の復元に挑戦」・「木の実をすりつぶす（石皿・磨石）」・「石に穴をあける（弓ぎり式）」・「火をおこす（舞ぎり式）」・「2009 縄文コレクション（縄文服を

試着しよう)」などのハンズ・オン展示が並び、生徒さんも時間を忘れて体験に熱中しています。

遺跡庭園「縄文の村」には、復元住居(口絵)3棟をはじめ、縄文人が利用していたと考えられる



麻の服は、ちょっとチクチク・・・

植生展示が園内全体に施してあり、縄文時代にタイムスリップしたような感覚を味わっていただけます。また、学校見学の集中する期間は、毎日いずれかの住居で火焚きを行い、より臨場感溢れる体験をしてもらえるように配慮しています。

さらに今年度からは、火おこ

し体験についても、より多くのご希望にそえる体制を整えております。火をおこすことの大変さを通して、火の恩恵や火を扱う上での心構え、グループで協力することの大切さなどを体感していただけたらと思っていますが、真剣に取り組む生徒さんの



火おこして、けっこう重労働!

姿を見て、こちらも大きなエネルギーをもらっています。

お弁当を持参された学校は、庭園で食べていただくことも可能で



けむい、くさい、くらい!でも、なぜか落ち着く住居の中。

す。緑豊かな庭園での昼食は、給食とは一味違った楽しいひとときになっています。当日雨が降った場合でも、会議室が利用可能ですのでご安心下さい。

今年度から一部前倒し実施となっている新学習指導要領(平成23年度完全実施)では、6年生歴史の学習内容冒頭が「狩猟・採集や農耕の生活」に改められ、縄文時代以前が再び範囲に含まれました。縄文人の暮らしと比較することで、農耕への転換から国家形成へと至る過程もより理解しやすくなったと思われませんが、教育現場の先生方は、これを具体的にイメージさせる手法について、また多く思案されていることと思います。当センターも、校外学習を通して生徒さんの理解を深め、スムーズな学習につながるよう、メニューの改良を加えていく所存です。また、土器のスケッチなど図画工作の内容を盛り込んだ事例など、施設活用の幅もさらに広がりつつあります。多くの学校の皆様のご利用をお待ち申しあげます。

(長佐古)



住居の入り口が狭いのは・・・なるほど!

殿竹遺跡は、世田谷区上北沢の都立松沢病院の敷地内にあります。東京都医学系総合研究所（仮称）の整備に伴い、平成19年度に工事用通路部分を第1期として調査が行われ、弥生時代の竪穴住居跡、縄文時代中期の竪穴住居跡などが検出されています。今回は建物の部分を第2期調査として平成20年11月から平成21年4月まで調査を行いました。

遺跡のある松沢病院周辺は平坦な台地上にあるように見えますが、東側がやや低くなり、今は暗渠あんきよとなっていますが、病院の東側を北沢川が流れ、やがて烏山川と合流して目黒川となり、品川付近で東京湾に注ぎます。松沢病院周辺はこの小河川の源流部分にあたります。このためか、本遺跡では地下水位が高く調査区内でも北側ではローム層上面近くまで地下水の影響を受けていました。

2期調査区は多くの樹木が繁茂する森の状態はんもで、樹木の保存のため、移植作業と発掘調査をある程度並行する必要がありました。移植作業が終了するまでは発掘調査が制約されましたが、そのほかは順調

に調査を進めることができました。

これまでに検出された遺構は縄文時代では、竪穴住居跡3基、土坑、ピットがあります。これらはどれも縄文時代中期後半に属します。

弥生時代では後期の竪穴住居跡が2基検出されています。いずれも調査区北側よりのやや低い位置で検出されています。

古墳時代では竪穴住居跡が1基検出されています。床面近くまで削平されて、攪乱を多く受けていますが、住居跡の長方形で周溝が廻り、西側にカマドが設けられる大まかな様子は捉えることができました。

中世では地下式坑が1基検出されています。出土遺物はなく、詳しいことはわかりません。遺跡内でも中世、近世の遺物はごくわずかしか出土していません。

遺跡の状態はあまり良い状態とはいえませんが、縄文時代から中近世まで、いろいろな時代の痕跡を見つけることができました。（岩橋）



縄文時代の住居跡



弥生時代の住居跡



古墳時代の住居跡



中世の地下式坑

多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査が終盤を迎えた1997年、No.313遺跡(町田市小山ケ丘)の調査は行われました。

調査の中で最も注目されたのは、古墳時代の1号横穴墓です。横穴墓とは、斜面に遺体を埋葬する横穴状の部屋(墓室)を掘り込んだ古墳時代後期の墓のことですが、特にこの1号横穴墓は墓室への入口(羨門部)に大規模な石積が施された、きわめて特徴的な墓でした。

墓室に通じる通路状の平坦部分(前庭部)は、多少先端が削られていたものの、長さが約19mもあり、全国でも最大級の規模をほこります。入口部には、前庭部の奥壁全面から両側壁の、長さ4.2m・幅3.8m・高さ3.1mの範囲にかけて石が積まれており、一点一点数えたところ、総数で945点、総重量約5.2tにも達しました。また羨門には柱状の切石が組まれ、さらに扉はしっかりと塞がれたままの状態であったことから、盗掘にあっていないこともわかりました。



1号横穴墓全景(空撮)

前庭部からは、墓前祭祀に使われたと思われる、静岡県・湖西窯産須恵器の大甕とフラスコ形(瓶)が、さらに追加の埋葬(追葬)の際に墓室から掻き出され



と思われる、直刀、六窓鏝(6個の穴をもつ鏝)、鉄の矢尻(鉄鏃)が出土しました。これらの出土遺

物より、横穴墓は7世紀中葉頃に造られたことも判りました。

長さ7.0m・最大幅3.1mの墓室には、床一面に川原石が敷き詰められていました(礫床)。最奥部の遺体を安置する部分は一段高くなっており(棺床)、周辺には人骨

片も確認できました。未盗掘の立派な横穴墓であることから、さぞ豪華な!? 副葬品が出土するのではと期待したのですが、墓室内からは刀子(小刀)2本が出土しただけで、墓室内の土もすべてフルイにかけてみましたが、残念ながら小さな玉の1個さえも出てきませんでした。

ところで、こうした石積施設をもつ横穴墓は、多摩川中流域の日野市・国分寺市に7世紀後半代のものが、さらに神奈川県相模川中流域(伊勢原市・座間市・厚木市・秦野市・海老名市)に、7世紀前半~後半のものが分布していることがわかっています。今回紹介した横穴墓は、地理的にも時期的にも、両者の中間に位置しているようです。果たしてどのような人が埋葬されていたのか、周辺遺跡の状況なども合わせ、さらに考えていきたいと思っています。

この横穴墓の発見は、当時マスコミでも報道され、その後に開催した見学会では、2日間で約1,500人もの方々が見学に訪れました。発掘調査報告書は、東京都埋蔵文化財センター調査報告第129集として2003年に刊行されています。(大西 雅也)

1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

#3 多摩ニュータウン No.313 遺跡

石器の「ツボ」 Vol.3

ナイフ形石器 (その1)

旧石器時代と縄文時代の石器の観察のツボを紹介する連載の第3回。毎回ひとつずつ石器を紹介していきます。今回は旧石器時代のナイフ形石器です。

博物館などでもっとも多く展示されている旧石器時代の石器は、ナイフ形石器です。というのもナイフ形石器は、日本列島の旧石器時代で、もっとも長い間もっとも広い範囲で、もっとも多く作られた石器だからです。ナイフ形石器とは「ナイフの形をした石器」という意味で、石片のもっとも鋭い縁をそのまま残して、それ以外の縁を潰すように加工した石器を言います。「ナイフの形をした」というところがツボで、決して「ナイフに使った」と言っているわけではありません。

というのは石器の用途は簡単にはわからず、一般に石器の名前は「…に似ている」という意味で付けられます。しかし最近では、使った時にできた石器の表面の傷を顕微鏡で観察することによって、用途を推測することができるようになりました。

ナイフ形石器を何に使ったかまだはっきりわかった訳ではないのですが、二つの用途が考えられています。一つは槍先です。長い柄の先端につけて、動物を仕留めるときに使いました。これは、前回紹介した槍先形尖頭器と同じです。そしてもう一つは、「ナイフ」です。「何だ…結局はナイフか」と言われそうですが、動物の肉や植物、木の枝などを切るために使ったと考えられます。

ところで現代ならば、ナイフは包丁、果物ナイフ、木工ナイフ、紙を切るためのカッターなどに細かく分かれ、私たちは必要に応じてそれぞれのナイフを使います。しかし、旧石器時代人は移動しながら暮らしていたため、きめ細かく道具を揃えることなどはしません。どんな用途にでも使えるナイフを用意していたと考えられます。そして、その発想の延長としてナイフ形石器を、ナイフだけではなく、槍先にも使っていたと考えるのです。

いろいろな道具を揃えなければ生きていけない私たち現代人は、少ない道具を工夫して使いながら暮らしている旧石器人に学ぶ必要がありそうです。一度、鋭く尖った石のかけらを拾ってきて、紙や草や肉を切ってみてください。意外といろいろなものを切ることができます。

ナイフ形石器の「ツボ」:

ナイフ形石器は、「ナイフ」や槍先に使った万能具です。現代とは違い、一つの石器にはいろいろな使い道があります。(伊藤)



ナイフ形石器



現代の「ナイフ」の数々
(果物ナイフ、カッターなどいろいろなものがある)



ナイフ形石器の
柄への装着例

くろがね物語 十七

古代刀の考古学 (中)

奈良時代以降、盛行する特徴的な刀の様式に「蕨手刀」^{わらびてとう}があります。刀の柄頭が早蕨のように丸く巻き込む形を示すことから名付けられたものです。この刀は、おもに関東甲信地方から東北・北海道にかけての東日本に広く分布しており、列島内ではこれまでに260点あまりが確認されています。その祖型は中部～北関東の古墳から検出されています。いっぽう、西日本では四国や九州に少数見られるのみです。

蕨手刀は、短寸で柄反りが弱い型式を古式として、しだいに長寸で柄反りが著しい型式へと変化します。最も新しい型式には、柄に毛抜き形の透かしの入るものも見られ、日本刀の源流を蕨手刀に求める説などもあります。

さらに、蕨手刀の大きな特徴は、異文化を持つ集団間において、墳墓の副葬品として採用されたことです。つまり、本州の倭の領域では石室墳や横穴墓^{よこあなぼ}、東北北部～



蕨手刀の形式 (上が古く、下が新しい)



八木光則 1996 年より転載

道南部では末期古墳や北海道式古墳、道東～道北部ではオホーツク文化期の土壌墓^{どこうぼ}などから見つかります。このことは、埋葬習俗とは関係無く、この刀が倭人社会から広く蝦夷や北方民族への交易品として流通し、族長層により宝器(ニイコロ)として受容されたと考えられます。本格的な鍛冶技術^{かじ}を持たなかった北の異民族にとって、「蕨手刀」には何か特別な霊力が宿ると信じられていたのかもしれませんが。(松崎)

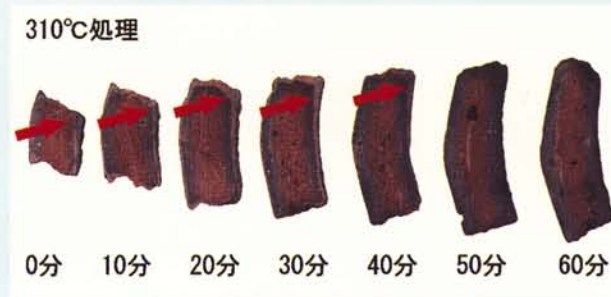
保存科学室 だより 8

一火災被災出土品の修復 その3一

今回は、被災した出土品の表面にこびりついた樹脂^{じゆしよご}汚れを取り除く方法について御紹介しました。しかし、それだけでは修復は終わりません。なぜなら、素焼きの瓦・土器には、熱で液化した樹脂^{すず}が煤などの汚れと共に内部に染み込んでしまっているからです。従来は、この汚れを取り除くことができず、被災出土品救済の大きな妨げになっていました。

そこで今回、新たに開発したのが熱処理法^{ねつしゆりほう}です。これは、樹脂が一定の温度で分解しながら揮発する性質を利用したもので、被災した資料をコンピュータ制御の電気炉^{せいきよ}を用いて500度以下の温度で加熱する方法です。土器や瓦は、これより高い温度で焼いていること、火災時にもほぼ同等の熱を受けてしまっていることから、加熱による変色・変形等の弊害^{へいがい}はほとんどありません。

下の写真は、手法の開発実験^{しゆほう}を行ったときの一枚です。左端のテストピース断面では、表面から約4mmのところまで染み込んでいたポリプロピレン樹脂が、約310℃で加熱することにより一時間ほどで揮発することが確認できました。実際の被災資料では、より多量の樹脂が浸潤^{しんじゆん}している場合、さらにはポリエチレンやポリスチレン等の別の樹脂が付着している場合などもあることから、約330℃で2時間半ほど揮発させています。また、熱処理の最終段階では、表面に残留^{ざんりゆう}した他の有機物を水洗で落ちやすくするため、460℃まで温度を上げて10分間加熱します。(長佐古)



熱処理法による樹脂の揮発実験の一例



子供の頃、落とし穴を掘って遊んだ記憶がかすかにある。大して深い穴ではないが、穴の上に細い横木をわたし、ススキや枯葉でカモフラージュしたもので、せいぜい足がはまる程度のものであったろう。

ここ多摩の縄文人はたくさんの落とし穴を掘った。もちろん遊びではなく、動物を捕獲するため、生きていくための手段としてである。これまでの多摩ニュータウン遺跡の発掘では、およそ1万基以上の落とし穴が発見され、今や多摩の縄文文化を特徴付ける代表選手となっている。ただし、これが落とし穴であると認定されるまでには意外にも多少の時間がかかっている。

多摩ニュータウン遺跡では、1966年頃に初めて調査されているが、その性格については不明とされていた。その後1970年8月、横浜市緑区の霧ヶ丘遺跡を調査していた一人の大学院生が、「ひょっとすると落とし穴ではないだろうか」とひらめき、その可能性を証明するために、発見された123基の形態分類、立地、年代、分布といった基本的な分析を元に、報告書中で30頁もの紙面を割いて真剣にそれを検証した。今では当たり前なことではあるが、誰も見たことがないものを証明することは安易なことではない。学問は常に思いつきで始まるが、肝心なことはそれを如何にもっともらしく証明できるかにかかっている。それがまた考古学の面白みでもあるのだが。

1970年代の後半になってようやく落とし穴としての認識が浸透していったが、さらに発掘によってより具体的に落とし穴であることを証明出来ないだろうかと、いろいろな調査方法が試みられた。中でも八王子市のNo. 804遺跡で試みられた、穴を掘らずに断面に沿って少しずつスライスしていく調査方法は、当時としては画期的な行為で、落とし穴説を有力なものにしていった。ただし、この方法は時間

と手間がかかることから一部では批判的な見方もあったが、落とし穴の構造を明確にすることができ、さらに坑底に埋め込まれた杭やカモフラージュ用の樹皮までもが発見され、落とし穴説を決定付けることとなる町田市のNo. 243遺跡の発見へとつながった。

もう一つ注目すべきヒントがある。落とし穴はどこでも見つかるものではない。地形的に起伏の激しい多摩丘陵では数多くの落とし穴が見つかるが、どこまでも平坦な地形が続くお隣の武蔵野台地に行くとほとんど発見されない。これは動物生息域の違いを如術にしめしており、縄文人が丘陵地を中心に落とし穴による狩を展開していたことがわかる。異なるものを比べることによって見えてくることがある。

縄文時代も終わりを告げる頃、落とし穴は作られなくなる。これまでに弥生時代の落とし穴は一例も見つかっておらず、落とし穴狩とはまさに縄文的狩猟法であったといえる。縄文時代も弥生時代も食用肉の主役は猪と鹿であることに変わりはないが、ここに面白い事実がある。縄文時代には猪の土製品が作られるが、鹿の土製品はない。逆に弥生時代では、銅鐸などに鹿の絵が描かれているが、猪が描かれることはない。縄文の猪、弥生の鹿といった、狩猟体系の違いがはっきりと現れている。

何故弥生以降は掘られなくなったのか。もちろん落とし穴の効率は決していいとは思えないが、1万年の長きにわたって掘りつづけられてきた物が、稲作を始めたたん掘られなくなってしまうのは、単なる効率的な問題ではないような気もする。そして、いつの頃からか狩猟そのものが专业化し、銃の使用とともに特定の集団に特化される。最近まで掘られていた落とし穴はいずれも作物を守るための防衛的なものであって、狩猟用のものではない。もはや縄文的狩猟用落とし穴は完全に失われてしまっている。それでもたまたま口にすることができる牡丹鍋は縄文的でもありその味は最高でもある。

多摩の縄文にまつわる事を、何回かにわたって書いていきたい。
(小葉)

